HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景
Author(s)	コラー, スサンネ
Description	研究ノート
Citation	スラヴ研究, 51, 391-413
Issue Date	2004
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39064
Type	departmental bulletin paper
File Information	51-014.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［研究ノート］

安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景

コラー・スサンネ

はじめに

安永 7（1778）年に、ロシア人一行が東蝦夷地のノッカマップに、翌 8（1779）年に厚岸に渡来し、松前藩に対し交易を要求したが、国法によって禁止されているとして、拒絶された。ロシア人が蝦夷地に出現したのは、これが初めてであった。

本稿が扱うのは、この時期のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景だが、時代状況を明確にするために、まず、この時期前後の日露の関係について手短に触れておこう。

安永年間以前の日露の接触をまとめると、16 世紀末から、豊富な毛皮資源を求めてロシア人のコサックはシベリアを横断しはじめ、17 世紀中期に太平洋へ到達した。さらにロシア人はアムール地方に進出したが、清国と衝突し、1689 年のネルチンスク条約締結によってこの地方から退いた。その結果、ロシアの関心が再び東方のオホーツク地方と北方に向い、17 世紀末にコサック隊長アトラソフ（Atlasov）がカムチャツカを探検し、伝兵衛という日本人に遭遇した。伝兵衛は 1695 年に、商品を積んだ船で大坂から江戸に向う途中、難破して、カムチャツカの南岸に漂着した漂流民だった。アトラソフは伝兵衛をサンクト・ペテルブルグへ連れていき、1702 年にピョートル大帝（Petr I, 在位 1682-1725)に謁見させた。伝兵衛から日本についての情報を得て、ピョートル大帝は日本への関心を一層高め、1705 年にサンクト・ペテルブルグに日本語学校を開設し、伝兵衛をそこの日本語教師とした。またピョートル大帝はコサックの報告などを通じて、北方への関心を深め、亡くなる直前に海軍大佐ベーリング（Bering）に探検を命じた。特に第二次ベーリング探険隊（1733-43）はアメリカ海岸に到達し、アジアとアメリカが海峡で隔てられていることを明らかにした。この探険によって、アメリカ北西海岸とアリューシャン列島が発見された。ベーリング探険隊の構成員であったシュパンベルグ（Spangberg）大尉とウォールトン（Walton）大尉はカムチャツカと日本をむすぶ航路を発見した。彼らには、千島の地図を作成する任務が与えられ、1738～42 年まで日本近海探険が行われた。シュパンベルグは 1739 年に本州まで到達し、仙台藩の幾つかの地点に投錨し、その地域の人々と接触した。

一方、安永年間以降の日露の接触に関しては、寛政 4（1792）年に遣日使節ラクスマン（Laksman）が根室に渡来したことが重要視され、従来の研究の関心もそこに向けられることが多かった。

しかし、安永年間のロシア人蝦夷地渡来については、関心の払われることが少なかったといってよい。ロシア人が千島に南下し、蝦夷地に渡来した背景には、当時の東シベリア、カムチャツカ、オホーツクなどの地方当局の方針があり、それは次のようなものだと理解されている。「地方当局は政府の大探険隊によらず静かに目立たぬように、蝦夷島にいたるまで

の全クリール諸島をロシアに併合しようと意図していた。農業の可能な南クリール諸島の獲得と対日交易は、地方当局を悩ませ、当時の極東地方にとって非常に深刻な実態となっていた食料供給の問題を解決し、獲得された毛皮と海産物の一部を販売する新市場を提供するはずであった」[1]。すなわち食料供給問題の解決のため、農業の可能な南千島を手に入れ、全千島をロシアに合併し、毛皮や海産物の販路の拡大を目的として、対日交易を希望したということがロシア人の蝦夷地渡来の理由とされてきた[2]。

しかし、ロシア人の千島南下や蝦夷地渡来と直接に関連がある当時のロシア側の事情についてはさらなる検討の余地があると考えられる。そこで本稿では、18世紀後半のロシア人のシベリアや北太平洋における活動を明確にし、ロシア人が南千島へ南下し、蝦夷地に渡来した経緯とその原因を検討する[3]。第一節では、毛皮商会の活動、露清交易、シベリア・オホーツク地域の行政機構、千島やカムチャツカにおける動向などについて述べ、第二節では、ロシア人の蝦夷地渡来の経緯について明らかにし、安永年間のロシア人蝦夷地渡来の再検討を行いたい。

なお、本稿では、帝政ロシア国内の事柄に関する日付の表記はロシア暦によるものとする。18世紀の日付にかんしては、このロシア暦の日付に11日を加えたものが新暦（グレゴリー暦）となる。また、ロシア人は千島列島を「クリル諸島」と呼び、カムチャツカ南端のロパトカ岬に近い島から順に、第1島・第2島などと番号をつけた。また、千島の島民を「kuril'tsi」、つまり「クリル」と呼んだ。さらに、北千島方面のアイヌを「kuril'tsi」、または「iasashnye kuril'tsi」、つまり「ヤサーク（毛皮税金）を払うクリル」とし、南千島方面のアイヌを「mokhnatye」、または「mokhnatye kuril'tsi」、つまり「毛深いクリル」と呼んで区別する場合もあった[4]。

1．18世紀後半のシベリアと北太平洋におけるロシア人の活動

（1）毛皮商会の活動と露清交易

ベーリング探険隊によって、ロシアの活動が北太平洋に広がり、アリューシャン列島が発見され、そこでは多くのラッコが生息していることが確認された。1741年には、ベーリング探検隊のチリコフ（Chirikov）大尉がアメリカ北西海岸からカムチャツカへ帰帆した際、900頭ものラッコ皮を持ち帰ったことから、新たに発見された島々の富は噂となり、シベリア商人の冒険的関心を煽った[5]。特にイルクーツクやヤクーツクの商人は一時的に小さな商

1 S. V. Znamenskii, *V poiskakh Iaponii. Iz istorii russkikh geograficheskikh otkrytii i morekhodstva v Tikhom okeane* (Blagoveshchensk: Knizhnoe delo, 1929), p. 154; S. ズナメンスキー著、秋月俊幸訳『ロシア人の日本発見』北海道大学図書刊行会、1979年、200頁。

2 秋月俊幸「日露関係の黎明」原暉之、外川継男編『スラブと日本』講座スラブの世界、第8巻、弘文堂、1995年、7頁；秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書館刊行会、1999年、174-175頁。

3 本稿は、安永7・8年のロシア人の蝦夷地における滞在と日露交渉に触れない。これについては拙稿「安永年間の蝦夷地における日露交渉と千島アイヌ」『北大史学』第42号、2002年を参照。

4 従来の日本の研究では「千島アイヌ」とは主に北・中部千島に居住していたアイヌを意味し、南千島や蝦夷地に居住する「アイヌ」とは区別される。本稿では、地域ごとにアイヌの独自の行動を検討するので、ウルップ島以北のアイヌを北千島方面のアイヌ、つまり「北千島アイヌ」とし、またエトロフ島以南のアイヌを南千島方面のアイヌ、つまり「南千島アイヌ」とし、蝦夷地のアイヌを含まない。

5 K.E.v. Baer, "Nachrichten aus Ost-Sibirien," *Beitraege zur Kenntniss des Russischen Reiches und der*

会を作り、毛皮を狩猟する船の装備を整える際に、共同で費用を出した[6]。毛皮商会の活動は毛皮を得ることが主眼であったが、同時に新たな島々の発見にも結び付いた。そのような商船隊は北太平洋へ派遣され、商人と猟師はさらにアリューシャン列島のいくつかの島々を発見し、アメリカ北西海岸まで到達した。1743年から1797年までの間におよそ11万4千頭のラッコが狩猟された[7]。商人が商船隊を派遣する際に、イルクーツクやヤクーツクなどにいる仲介人は猟師を雇い、また船の建造、装備に必要な品物を購入し、オホーツクやカムチャツカの船が建造、装備される港へ運送した[8]。そこでは、猟師が船大工や艤装人夫を兼ねており、また航海では、当時のシベリアに熟練した水夫がいなかったため、彼らはその役割をも担った[9]。このような航海のために準備する船はロシア語で「シティキ」(shitiki) と呼ばれる２本マストの船であり、釘を打たず、船板は皮紐で縫い合わせたものだった[10]。船には、一般に30人から40人、時には70人に及ぶ船員が乗り込んだ。その中には、航海士、水先人と発送係などがおり、発送係は獲得した毛皮の量と、毛皮と交換で入手した物品の量を報告する役割を果たした[11]。

船の建造と艤装の費用は高額であった。木材以外の材料はヤクーツクから馬で運搬する必要があった。また毛皮狩猟の航海は時には３、４年も続くことがあり、そのための食糧を用意する必要があったが、レナ（Lena）川地域から運ばれる穀物は高価なうえ、オホーツクやカムチャツカでの畜牛の数は僅かであり、十分な食糧にはならなかった。結局、クワス[12]と発酵させた酒の用意は十分にされたが、乗組員たちは一般的な越冬地であるベーリング島で海獣を狩猟し、その肉を蓄え、食糧不足を補った[13]。一度の航海の費用は大抵１万５千～２万ルーブルかかり、３万ルーブルに及ぶ時もあった。その費用は一般に30～50の株に分け、出資を募り、一株は300～500ルーブルの値段であった[14]。航海前には契約が結ばれ、カムチャダール以外、費用を出資した商人、猟師、航海士、水先人、発送係の全員が署名をした。一般に乗組員の数はロシア人と先住民がほぼ同数で、航海に参加した先住民は出資者ではなく、彼らには安い給料が与えられるのみで、航海終了後の利益は分配されなかった[15]。ロシア人は最初、壊血病にかかりにくい体質であることからカムチャダールを雇った[16]。

---

angrenzenden Laender Asiens. Hg. K.E.v. Baer, Gr. v. Helmersen. 1. Folge, Bd. 7. Nachrichten aus Sibirien und der Kirgisen-Steppe (Osnabrueck: Biblio-Verlag, 1968), Neudruck der Ausgabe 1845, p. 139.

6 William Coxe, *Account of the Russian Discoveries between Asia and America to Which Are Added the Conquest of Siberia and the History of the Transactions and Commerce between Russia and China. With Supplement to Russian Discoveries.* Third Edition (New York: Augustus M. Kelley, 1970), p.8.

7 Baer, "Nachrichten aus Ost-Sibirien," p.141.

8 Vasilii N. Berkh, *A Chronological History of the Discovery of the Aleutian Islands or the Exploits of Russian Merchants. With a Supplement of Historical Data on the Fur Trade.* Trans. D. E. Krenov, R. A. Pierce (Kingston: Brown & Martin, 1974), p 11.

9 Mary Elizabeth Wheeler, "The Origins and Formation of the Russian-American Company." Unpublished Ph.D. dissertation (University of Michigan, 1965), p. 24.

10 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, p.9.

11 Wheeler, "The Origins and Formation," pp. 24-25.

12 クワス（kvas）はライ麦、小麦、パン屑を発酵させて作ったロシアの清涼飲料である。

13 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, pp. 9-10.

14 Ibid., p.10.

15 Wheeler, "The Origins and Formation," p.26.

16 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, p.9.

1780年代からカムチャダールに代わって、アリューシャン列島の先住民であるアリュートが雇われるようになった。アリュートはより熟練した猟師で、現地で雇い入れることから、生活の面倒をみる必要がなかった[17]。

毛皮を狩猟する航海は危険が多く、カムチャツカ近海でよく船が難破し、さらに乗組員が先住民に攻撃されたり、殺害されたりしたこともあった。しかし、航海が成功した場合、船荷の売却から生ずる利益は相当なものであった[18]。船がアリューシャン列島に達すると、先住民に狐を捕まえるためのわなが渡され、ロシア人の猟師もこれに従事したが、毛皮の大部分は先住民の努力によって得られた[19]。毛皮の代金のうち十分の一は税関で支払い、残りの利益は一部を教会や学校などの公共施設に寄付し、それ以外を配当金として出資者で分配し、事業が終わると同時に、商会も解散した[20]。ロシア人が乱獲したため、カムチャツカの沿岸でのラッコの数が減少し、猟師はさらなる狩猟場を求めて、より東方に航海する必要があった[21]。

ロシア商人は北太平洋で獲得した毛皮をまずカムチャツカやオホーツクへ持ち込み、その大部分はその後イルクーツク経由でキャフタ（Kiakhta）へ運ばれた。オホーツクからキャフタへの毛皮の運搬は一般に2年、カムチャツカからだと3年もかかった。しかし、ロシアにとってキャフタは毛皮交易における重要な取引地であった[22]。

1727年に露清間で締結されたキャフタ条約によってロシアは3年おきに200人の公式な商人団を北京へ派遣させることになっていた[23]。また露清国境のキャフタが交易地に定められ、1730年に清国側には買売城（Maimaicheng）が建設された[24]。

ロシア政府は清国への主な輸出品であった毛皮を専売した。また清国からのルバーブと煙草の購入もロシア政府が独占したため、国境における政府から保護を受けていない一般の商人の交易は徐々に衰退した[25]。

このような商人の交易には税関の取り締まり、高い関税など、様々な制限が課されたため、密輸へと駆り立てられる商人が現れた。キャフタは密貿易の中心となり、その結果、政府の御用商人団は相当な損害を受けることとなった。毛皮などの密売は政府による厳しい取り締まりにもかかわらず続き、ロシア国庫に相当な損害をもたらした。結局、御用商人団による交易は減少し、一方一般の商人による交易は様々な制約にもかかわらず増加した[26]。そのため、政府は清国との交易独占に失敗し、利益を確保できなくなったことから、エカテリナ2世（Ekaterina II, 在位1762 - 96）は1762年7月31日に政府の独占、また北京への御

17 Wheeler, “The Origins and Formation,” p.25.
18 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, pp. 10-11.
19 Wheeler, “The Origins and Formation,” p.25.
20 Ibid., p.28; Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, p.11.
21 Baer, “Nachrichten aus Ost-Sibirien,” p. 140.
22 Wheeler, “The Origins and Formation,” p. 32.
23 A. K. Korsak “Istoriko-statisticheskoe obozrenie torgovykh snoshenii Rossii s Kitaem” *Uchenye zapiski Kazanskogo universiteta* (Kazan', 1856), kn.1, p.117.
24 Ibid., pp. 140, 142.
25 M. I. Sladkovskii, *History of Economic Relations between Russia and China*. Trans., M. Roublev (Jerusalem: Israel Program for Scientific Translations, 1966), pp. 43-44.
26 Ibid., p. 49; 政府と一般の商人との競争についてはKorsak, “Istoriko-statisticheskoe obozrenie,” pp. 120-129を参照。

用商人団の派遣を廃止し、国境と北京における清国との交易を自由化した[27]。そして交易を希望し、露清間の条約に規定された関税を払い、また御用商人と同じやり方で取り引きをするならば、交易に参加できることとなった。また清国との自由な交易を行うため、以前勅命によって禁止された毛皮類、すなわちラッコ、オオヤマネコ、ネルチンスクとヤクーツクの栗鼠、黒狐と銀狐、カムチャツカとヤクーツクのクロテン皮の取り引きを解禁し、これらの毛皮類の輸出を、関税を払った者に対して許可した。このように「成すにまかせよ」を原則とするエカテリナ2世はあらゆる独占を廃止し、完全な自由貿易を可能にした[28]。1772年以降、キャフタは露清交易が行われる唯一の場所となり、交易は政府による毛皮輸出の独占放棄によって激増した。

清国は毛皮の質にはこだわらず、あらゆる皮を買い取った[29]。特に清国商人が好んだのは栗鼠の毛皮であった。その他の毛皮類はおこじょ、クロテン、狐などであった。またロシア人の猟師がカムチャツカとアリューシャン列島に進出するとともに、キャフタへ運送された毛皮のなかでラッコ皮の量が増えた。ラッコ皮一張はカムチャツカで30～40ルーブルであったが、キャフタの清国商人には80～140ルーブルで売却された[30]。毛皮は1757～1784年のキャフタ交易における輸出額の85パーセントに及んだ[31]。また毛皮以外の輸出品は衣服、鞣革、金属製品などであった。

一方、清国の主な輸出品は綿織物であり、その他に絹織物、生糸、砂糖、陶磁食器、ルバーブ、煙草などがあった[32]。シベリア商人やロシアの貴族は特に絹織物を好み、ロシア政府は清国から輸入される絹織物の値があまりに高いので、国内で絹織物の生産を始めた。その結果として、中国絹の輸入が18世紀末期には減少し、かわってお茶がもっとも好まれるようになった[33]。

キャフタ交易は清国側がロシア側の不法な越境、交易規定に関する違反などを含む些細な違反を理由にたびたび中断されたにもかかわらず、繁栄した[34]。ロシアは清国との交易がロシアの国庫に莫大な利益をもたらすことから、再三清国側に譲歩せざるをえなかった。また、キャフタ交易はシベリアの開発に大きく貢献し、シベリア商人は大きな利益を得た[35]。

---

27 Ibid., p. 129; Sladkovskii, *History of Economic Relations,* p. 149.

28 Korsak, "Istoriko-statisticheskoe obozrenie," p.129.

29 P.S. Pallas, *Reise durch verschiedene Provinzen des Russischen Reichs*. Dritter Theil (Graz: Akademischer Druck u. Verlag, 1967), Nachdruck der Ausgabe St. Petersburg, Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, 1771-1776, p.154.

30 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, pp.13-14.

31 Sladkovskii, *History of Economic Relations,* p. 51.

32 A.N. Khokhlov, "The Kyakhta Trade and Its Effect on Russian and Chinese Policy in the 18th and 19th Centuries," in S. L. Tihvinsky, ed., V. Schneierson trans., *Chapters from the History of Russo-Chinese Relations 17th-19th Centuries* (Moscow: Progress Publishers, 1985), p.74.

33 Ibid., p. 72. ロシアと清国のそれぞれの輸出品については Pallas, *Reise durch verschiedene Provinzen*, pp. 136-153 に詳しい。

34 Khokhlov, "The Kyakhta Trade," p.73. 1744～92年の間、キャフタ交易は1762年から6年間、1778年から2年13日、1785年から7年間中止となった。また1744年には17日、1747年には2日、1751年には1日、1753年には5ヶ月3日、1756年には1ヶ月7日、1759年には11日、1775年には3日間閉鎖となった。

35 Ibid., p.72. 年次売上の平均は1755～62年に1,011,129ルーブル、1768～78年には2,300,122ルーブル、1780～85年には6,361,612ルーブルに及んだ。

（2）ロシア政府の毛皮商会への対応

商船隊が新たな土地を発見することや先住民をロシア国籍に編入することは、ロシア領の拡大となるうえ、ヤサークの増収、毛皮の獲得量の増加、さらに毛皮にかかる税収の増加がみこまれ、国庫にとっても収入の増大につながった。そのため、ロシア政府は商船隊と毛皮の狩猟に対して好意的な態度を示し、その活動を奨励する方針をとった[36]。

1774年まで、毛皮商会は国庫に対して、獲得した毛皮の売上高の一割を税金として払うえ、船荷の一割は税関に渡す義務を負わされた[37]。政府は、1755年に各毛皮商船隊にヤサーク収税吏として1、2人のコサックを乗船させ、商船が獲得した毛皮量を正確に記録させた。またヤサーク収税吏は新たに発見された島々について詳細な報告を得るために島々の興味深い話を記録する任務も与えられた[38]。さらに政府は、シベリア総督ソイモノフ（Soimonov）[39]に毛皮商会の活動を円滑にする対策を施すべきだとし、1759年にはカムチャツカを出港した毛皮商船隊の報告書を編纂する指示を与えた[40]。ソイモノフは、商船隊を援助し、同年にはカムチャツカやオホーツク政庁に対し、直接商会へ火薬を渡す許可を与えた。従来地方長官には、中央軍当局の公認なしに火薬を扱う権利がなく、商会がカムチャツカやオホーツク長官に火薬の支給を申請すると船の派遣がしばしば遅れた[41]。1761年にソイモノフは政府から、商船隊のために地図を作成すること、島々の先住民と良好な関係を築き、彼らとの交易の可能性を調べるよう、商船隊に指令状を渡すことを命じられた。指令状では、海獣を狩猟し、また海獣が生息している島々を発見することを希望している人には、自由な行動を許可することが強調されていた[42]。

船を装備するには相当な金がかかり、シベリアやカムチャツカでは、商人向けの金融機関の貸付が行われなかったため、商人は国庫の援助を得ようとした。毛皮商会への貸付を容易にするため、1774年にカムチャツカ長官ベーム（Behm）は、カムチャツカに銀行を設立することを政府に求めたが拒否された。しかし同年、政府は毛皮にかかる税金の一割を廃止し、税関に払う税のみ維持することとした[43]。また毛皮商会に対し財政面にわたる援助をする方針もとられた。さらに政府は業績をあげた商人に対し、褒美としてメダルを与えたり、貴族の称号を与える方針をとった[44]。

1764年5月4日にエカテリナ2世は海運省宛に、北太平洋における新たな島々の調査と開発のための探検隊を組織するよう勅命を出した[45]。そのなかでエカテリナ2世は、従来の

36 Raisa V. Makarova, *Russkie na Tikhom okeane vo vtoroi polovine XVIII v.* (Moskva: Izdatel'stvo "Nauka," 1968), p.136.
37 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, p. 6.
38 Makarova, *Russkie na Tikhom okeane*, p.136.
39 Fedor Ivanovich Soimonov は1757～63年シベリア県総督であり、北東シベリアへ多くの探険隊を組織した。
40 Makarova, *Russkie na Tikhom okeane*, p.137.
41 Ibid., pp.137-138.
42 Ibid., p.138.
43 Ibid., p.139.
44 Ibid., pp.139-140.
45 1764 god maia 4. Ukaz Ekateriny II Admiralteistv - kollegii ob organizatsii ekspeditsii dlia opisaniia i osvoeniia novykh ostrovov, otkrytykh v Tikhom okeane, No.22, A.I. Alekseev, R.V. Makarova, et al., red., *Russkie ekspeditsii po izucheniiu severnoi chasti Tikhogo okeana vo vtoroi polovine XVIII veka. Sbornik dokumentov* (Moskva: Nauka, 1989), p. 76.

探検は新たな土地を発見したが、それは科学や航海についての十分な知識を持っていない人々によって実行されたことを指摘した。以後は、シベリア総督チチェリン（Chicherin）(46)の申請に従い、海運の知識をもち、有能な船員や航海士をシベリアへ派遣する勅命を出し、派遣する人々には、航海後の昇進と年金を支給し、航海中は年金額の2倍の給料も保証した。また海運省に全ての商船隊の監督を任せ、商船隊と常時連絡をとりあい、航海の装備に必要な地図と道具なども提供するべきだと述べた。

以上のように、政府は国に有益となる商船隊の派遣を支援し、商船の装備と組織化を地方機関の自由な裁量に任せるとともに、北太平洋における商船隊の活動について、その状況を把握し活動を見守ったことが窺える。

政府は、1764年から1769年の間に海運士官クレニツイン（Krenitsyn）とレヴァショフ（Levashov）の指揮下で、アリューシャン列島についての正確な情報を得て、島々を正式にロシア領に編入するための「秘密」の探検隊を編成させた(47)。シベリア総督ソイモノフの施策や政府が取った処置によって、北太平洋における毛皮商船隊の活動は1760年代以降さらに活発化した。

（3）シベリア・オホーツク地域の行政機構

シベリア行政関係図・管轄図

1708-1764年
シベリア県
トボルスクを中心に

シベリア県総督
1752 - 57 V.A.Miatlev
1757 - 63 F.Soimonov
1763 - 64 D.I.Chicherin

1732年から

1764年-1782年
トボルスク県
イルクーツク県

1772年から

シベリア・オホーツク地域

5州（Provintsiia）
トボルスク州
イルクーツク州
イェニセィスク州
フャトスク州
ソリカムスク州

7郡（Uezd）
イルクーツク郡
ヤクーツク郡
ヴェルホレンスク郡
セレギンスク郡
ウディンスク郡
ソリムスク郡
ネルチンスク郡

— **オホーツク地方**（オホーツク一帯・カムチャツカ・千島・アリューシャン列島）

イルクーツク州 — オホーツク政庁 — オホーツク一帯（カムチャツカ・千島・アリューシャン列島）

イルクーツク県 — オホーツク政庁 — カムチャツカ地方（千島・アリューシャン列島）

イルクーツク県 — カムチャツカ政庁・ボリシェレツク（千島・アリューシャン列島・イシギンスク）

イルクーツク県知事	**オホーツク長官**	**カムチャツカ長官**
1764-67 Wulf Frauendorff		
1767-74 Adam Bril’	1769-75 Vasilii Zubritskii	1772-73 Timovei Shmalev
1774-79 Fedor Nemtsov	1775-81 Savva Zubov	1773-79 Magnus Karl Behm
1779-82 Franz Klichka		1779-81 Vasilii Shmalev

46　チチェリンはソイモノフの後任として1763～64年シベリア県総督であった。
47　Wheeler, “The Origins and Formation,” p.13.

以上の図は、シベリア・オホーツク地域の行政機構と責任者の概略を示している。それによると、1708年のピョートル大帝の行政改革によって、シベリア県（Sibirskaia guberniia）が設置され、トボルスクはその行政の中心となり、総督が先頭に立った[48]。1719年にシベリア県が五つの州（provintsiia）に区分され[49]、シベリア・オホーツク地域はイルクーツク州に属し、イルクーツク州の一番大きい郡（uezd）であるヤクーツク郡のなかにオホーツク地方が含まれた[50]。しかしベーリングの探検が行われる際、その準備基地となったオホーツク海岸が重視されたことから、1732年にはオホーツクに政庁が置かれ、それ以降、オホーツクはヤクーツク郡から分離されて独立した行政単位となり、イルクーツク州直轄となった[51]。なお、オホーツク政庁の管轄はオホーツク一帯、カムチャツカ、千島、アリューシャン列島に及んでいた[52]。また1764年にシベリアがトボルスク県（guberniia）とイルクーツク県に分けられた[53]。千島などを含むカムチャツカ地方は依然としてオホーツク政庁に属していたが、1772年にカムチャツカ地方がイルクーツクの管轄となった[54]。またカムチャツカ政庁はボリシェレツク（Bolsheretsk）にあった[55]。

（4）ベーリング探検以降の千島の情勢

ベーリング探検以降、千島へ足を運んだのは主にヤサーク収税吏と毛皮猟師であった[56]。

ロシア人は千島で遭遇したアイヌに対し、毛皮からなる税金（ヤサーク）を課した。ヤサーク収税吏は定期的にカムチャツカのボリシェレツクから島々へ赴き、千島アイヌに遭遇した際には名簿に記入し、ヤサークを徴収した。その結果、狩猟のために時折島から島へ移動する千島アイヌが同時に幾つかの名簿に載せられることがあり、支払われるヤサークが数倍になった[57]。またヤサーク収税吏は島々で略奪を行い、アイヌに対してたびたび残酷に振る舞った[58]。そのため、多くの千島アイヌはロシア人がまだ到達していない南方の島々へ逃亡した。

また毛皮の狩猟は主に北太平洋、特にアリューシャン列島で活発だったが、同時に千島でも行われていた。例えば、1743年から1750年までの間ヤクーツクの商人キリロフ（Kirilov）

48 Marc Raeff, *Siberia and the Reforms of 1822* (Seattle: University of Washington Press, 1956), p.4.
49 Ibid., p.4; A.I.Krusanov, red., *Istoriia dal'nego vostoka CCCR. V epokhu feodalizma i kapitalizma: XVIIv. - fevral' 1917 god* (Moskva: Nauka, 1991), p. 128.
50 Ibid., pp.128-129.
51 Karl von Ditmar, "Allgemeines ueber Kamtschatka," *Beitraege zur Kenntniss des Russischen Reiches und der angrenzenden Laender Asiens*. Hg. L.v. Schrenck, C.M. Maximowicz. 3. Folge, Bd. 8. Reisen und Aufenthalt in Kamtschatka in den Jahren 1851-1855 (Osnabrueck: Biblio Verlag, 1970) , Neudruck der Ausgabe 1900, p.198.
52 Istoriia, *Istoriia dal'nego vostoka CCCR*, p.129.
53 Erik Amburger, *Geschichte der Behoerdenorganisation Russlands von Peter dem Grossen bis 1917* (Leiden: E.J. Brill, 1966), p.404.
54 A.S. Sgibnev, "Istoricheskii ocherk glavneishikh sobytii v Kamchatke, 1772 g.-1816 g.," *Morskoi sbornik*, No.7 (1869), p.2.
55 Coxe, *Account of the Russian Discoveries*, p.5.
56 またキリスト教を普及するために司祭が千島を訪れたが、本稿では言及しない。
57 A. S.Polonskii, *Kurily*. Zapiski imperatorskoi rossiiskoi geograficheskoi obshchestva, Tom IV, otdel etnografii (S. Peterburg, 1871), pp.32-33.
58 A. S. Sgibnev, "Popytki russkikh k zavedeniiu torgovykh snoshenii s Iaponieiu, v XVIII i nachale XIX stoletii," *Morskoi sbornik*, No. 1 (1869), p.45.

は千島方面で狐やラッコを狩猟し、富を築いた[59]。

千島を訪問したロシア人は現地で遭遇した千島アイヌと日本人漂流民を通じて、日本についての情報を得た。1744年にヤクーツクの貴族ノヴォグラブレンヌィ（Novograblennyi）が第4島マカンルシを訪れ、以前に第16島シムシル島にいたアイヌからクナシリ島にいる日本人の高官が、千島アイヌに商品を直接クナシリに持参するようロシア人に伝言を頼んだと聞いた。ノヴォグラブレンヌィはその情報をボリシェレツク政庁へ伝え、自ら作成した千島アイヌの居住地や海獣の生息地を示す地図を添えた[60]。また、1745年に、ヤサーク収税吏スロボチコフ（Slobodchikov）が第5島オンネコタンに来航した際、漂流した日本人[61]に遭遇し、ユサンチェヤ（Iusancheia）という日本人から、アトキス（Atkis）島[62]には良港があり、そこへはマツマイ（Matsmai）[63]から大きい船がラッコ皮や鷹の尾を求めに来ることを聞いた。またイルクーツクに滞在している日本人[64]から、第21島シコタンを含む千島の島々が日本から独立していること、さらにその島々を領有すれば、日本との交易関係を容易に樹立できることを聞かされた[65]。

以上のような情報を得て、シベリア総督ソイモノフは一層千島への関心を深め、千島を調査する必要性を指摘し、オホーツク港にはそれを実現できる政府の船が不足しているため、政府の船ができるまでは現地の商人が自費で商船を派遣し、千島の島々の調査を行う許可を与えることが重要であると示唆した。また艦船より商船のほうが島民に不安を抱かせないだろうと述べ、1759年4月24日元老院に猟師の千島方面における自由な狩猟活動と航行を上申した。一方、ソイモノフは1761年2月20日には、カムチャツカ兼オホーツク長官プレネスネル（Plenesner）へ命令書を出した[66]。ソイモノフはそのなかで、千島についての知識がまだ断片的で、約20の島々のうち、ヤサークを課す島は3・4島にしか及んでいないことを指摘し、またシュパンベルグ（Spangberg）大尉はほぼ全列島を航行したが、島々の情報や住民の様子については十分な知識を得ておらず、シュパンベルグ探検に基づく情報だけでは満足できないと述べている。さらにソイモノフはフィグールヌィエ（Figurnye）諸島[67]の調査をする必要性を指摘し、フィグールヌィエ諸島がマトマイ（Matmai）という島の一番近くにあること、マトマイ島は日本国に属していないこと、ウォールトン（Walton）大尉がマトマイ島を訪れた時住民から歓待を受けたことなどを述べている。そしてプレネスネル

59 Berkh, *A Chronological History*, p.77.
60 Sgibnev, “Popytki russkikh k zavedeniiu,” p.45. 1744年にクナシリ場所はまだ開設されていなかった。
61 Ibid., p.45. この漂流船は南部領佐井村の商人竹内徳兵衛の船で、1744年に大豆、昆布、〆糟などの松前の産物を積み、江戸へ向ったが、1745年にオンネコタン島へ漂着した。生存者はロシア人にカムチャツカへ連行され、以後サンクト・ペテルブルグとイルクーツクの日本語学校の教師となった。ズナメンスキー『ロシア人の日本発見』159-160頁。
62 アトキス（Atkis）は厚岸をさすと思われるが、ロシア人は蝦夷地をアトキスと呼び、千島の第22島とみなした。
63 マツマイ（Matsmai）、またマトマイ（Matmai）は松前をさすと思われる。ロシア人はマツマイ、マトマイを日本の町とみなし、またマツマイを島とみなすこともあった。
64 イルクーツクの日本語学校の日本人教師。1705年にサンクト・ペテルブルグに開設された日本語学校は1754年にイルクーツクに移転した。
65 Sgibnev, “Popytki russkikh k zavedeniiu,” p.46.
66 Polonskii, *Kurily*, pp.38-40.
67 フィグールヌィエ諸島はハボマイ諸島をさすと思われる。

に、元老院からの返答が出るまで、カムチャツカ長官在任中に千島におけるヤサーク徴収の実態、住民の数、海獣の種類などについて調査することを命じている。

1761年8月24日に元老院はソイモノフの上申に対する裁可をし、商人宛ての千島における毛皮狩猟の許可に関する勅命を出した(68)。これによって、ソイモノフが要請した自由な毛皮狩猟と調査は許可され、その際住民に対して紳士的な態度をとることが命ぜられた。また毛皮狩猟にあたっては、獲得した毛皮量をごまかさず、その十分の一を税金として払うこと、航海についての報告をすることが強調され、またソイモノフには、商会の活動の隊長として、地図作成などの支援を行う役割が与えられた。

このように、千島における自由な毛皮狩猟が許可され、1770年代には特にヤクーツクの商人ザハロフ（Zakharov）とプロトジャコノフ（Protod'iakonov）商会がこれに従事していた(69)。

しかし、千島アイヌはヤサーク収税吏や猟師の略奪などから逃れるために南方の島々へ逃亡した。そのような逃亡者を連れ帰る動きもあり、1760年から1764年までヤクーツクの商工業者ノヴィコフ（Novikov）が千島の南方の島々へ逃亡したアイヌの連行とヤサーク徴収のため派遣された。1764年にシベリア県総督チチェリンはエカテリナ2世宛に、ノヴィコフの千島における滞在について報告した(70)。それによると、ノヴィコフは第1島、第2島、第5島、第7島と第10島に滞在し、出会ったアイヌ首長に鉄砲などの贈物を渡した、その際、アイヌはとても喜び、彼らなりの習慣に基づいて返礼した。そしてロシア人から受け取った品物は日本から手に入れる品物より質が良いと語った。ノヴィコフは過去に第2島から第4島、第10島へ逃亡した30人のアイヌを第2島へ連行することに成功し、連れ戻されたアイヌはロシア国籍に編入され、ヤサークを課せられた。ノヴィコフはアイヌ首長チキン（Chikin）から、1761年に第20島クナシリへ2艘の日本船が渡来し、ラッコ、鷲の羽、脂肪などを交易したこと、その後船のうち一艘は破船したが乗組員は救助され、アイヌから親切に扶養されたこと、しかしかつてアイヌは漂流した日本人を全員殺していたことなどを聴取した。さらにチキンは、助けた日本人を翌年船で帰らせ、日本からはその礼として贈物を載せた船が戻ってきたと語った。ノヴィコフは千島に滞在中、アイヌから日本の金貨をもらい、アイヌ自身はその金貨を南千島アイヌからもらったと語った。チチェリンはエカテリナ2世宛の報告書で、以後贈物として鉄砲を先住民に渡すことを禁止したことをつけ加えた。

また1766年5月22日には、ボリシェレツク政庁はコサックのチョールヌイ（Ivan Chernyi）宛に指令を出した(71)。それによると、チョールヌイは南方へ逃亡したアイヌを連れ帰り、彼らを従属させて、ヤサークを課し、アイヌの生活ぶりやアイヌと日本の間の交易について調査を行うことなどが命ぜられていた。1766～69年にチョールヌイ探険隊が南千島へ派遣され、ウルップ島とエトロフ島まで到達し、千島についての詳細な報告を残したが、一方アイ

68 1761 god avgusta 24. Ukaz Senata o razreshenii kuptsam promysla zverei na Kuril'skikh ostrovakh, Nr. 15, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 58-59.

69 Berkh, *A Chronological History*, p.77.

70 1764 god. Raport D.I. Chicherina Ekaterine II o prebyvanii Iakutskogo posadskogo E.Novikova na Kuril'skikh ostrovakh v 1760 - 1764 godakh, No.27, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp.96-97.

71 Polonskii, *Kurily*, pp.42-44.

ヌに対しては残酷な行為を行った(72)。1771年に南千島アイヌはウルップ島でロシア人に報復し、21人のロシアの猟師を殺害した(73)。

このように、ソイモノフは千島に渡ったヤサーク収税吏とイルクーツクにいる日本人漂流民から日本、また南千島において日本とアイヌの間に交易が行われることを聞き、シュパンベルグ探検の知識不足と千島の詳しい調査の必要性を指摘した。その結果、政府は千島における商人への自由な毛皮狩猟と島々の調査を許可した。その後行われたチョールヌイ探検の目的は南千島についての細かい調査、逃亡したアイヌの連行、アイヌからのヤサーク徴収、日本とアイヌ間の交易について調査をすることにあったが、日本まで赴く考えはこの段階では見られなかった。

（5）カムチャツカにおける混乱とベームの政策

ロシアはシベリアへ進出するとともに、食糧確保の困難に直面していた。ウラル山脈から太平洋への陸路に沿い、主に四つの農業開拓地があり、そこから穀物の供給が行われた(74)。なかでもレナ（Lena）川の流域が農業の中心となった。その後、アムール地方へ進出したロシアはその地域に農業を発展させようとしたが、ネルチンスク条約によって、この地域から撤退した。結局オホーツク・カムチャツカの地域において農業が開始され、ここを食糧供給源にするため努力した。特にベーリング探検隊の派遣にあたって、海獣の豊富な棲息地が発見されたことから、オホーツクとカムチャツカは狩猟船の出発地の中心となり、この地域は重視された。

カムチャツカにおける最初の農業の試みは18世紀初期、修道院によって行われた(75)。その後、ベーリング探検隊の数名にこの地域の農業の可能性を探るよう指示が出されたため、菜園を作るなどの実験を行ったが、農業の可能性への評価は様々であり、なかでもベーリングはこの地域の農業発展について楽観的で、元老院に農業開拓の推進、家畜の繁殖、また開拓民の移住について提案した(76)。政府はその勧告に基づいてこの地域の農業に取り組んだ。しかし、時折の豊作を除いて、穀物の出来はよくなく、また家畜の繁殖も難しかった。また野菜のなかでは、カブ、大根、じゃが芋などの根菜類の出来は良かったが、レタス、キャベツ、エンドウ豆のような野菜の育ちは悪かった(77)。 ロシア政府は陸路と海路による食糧供給の困難から、特にカムチャツカ地域に農業発展の期待を持ち続け、この地域を穀物貯蔵地、あるいは家畜飼育地にしようとした(78)。

---

72 チョールヌイの探検に関する報告はPolonskii, *Kurily*, pp. 53-71に所収。チョールヌイの残酷な行動はズナメンスキー『ロシア人の日本発見』164-168頁に詳しい。

73 所謂ウルップ事件については Sgibnev, “Popytki russkikh k zavedeniiu, “ p.46を参照。

74 ４つの農業開拓地の名前は①トボルスク（Tobolsk）、②トムスク（Tomsk）・クズネツク（Kuznetsk）、③ヴェニセイスク（Veniseisk）・クラスノヤルスク（Krasnoiarsk）、④アンガラ（Angara）・イリム（Illim）・レナ（Lena）であった。James R. Gibson *Feeding the Russian Fur Trade. Provisionment of the Okhotsk Seaboard and the Kamchatka Peninsula. 1639-1856* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1969), p.157.

75 Ibid., pp.160-163.

76 Ibid., pp. 162-163.

77 Ibid., p. 179.

78 Ibid., p.173.

1750年にはおよそ100世帯のロシア人とヤクートの家族がオホーツクとカムチャツカ地域に点在し、農業を行った[79]。18世紀中期にオホーツクとカムチャツカにおける農業開拓はある程度定着し、この時期から農業は地方の長官の重要な課題となり、開拓の推進が重視された[80]。カムチャツカではミルコヴォ（Milkovo）とクリュチ（Klyuchi）が農業開拓の中心となった。

一方、1760年代以降のカムチャツカは混乱を極めた。1768年にオホーツクから疱瘡が持ち込まれた結果、カムチャツカの人口が激減した[81]。また1771年には、カムチャツカへ流されたベニョフスキー（Beniovskii）[82]が他の流刑囚と共に反乱を起こし、船を奪って逃走した。ベニョフスキーの反乱などは政府の関心を促し、エカテリナ2世はカムチャツカにおいて秩序を回復するためには有能な人材が必要だと判断し、1772年4月30日にイルクーツク県知事ブリル（Bril'）[83]に勅命を出した。それによると、陸軍少佐ベーム（Behm）[84]が年間600ルーブルの報酬でカムチャツカ長官に任命されること、ベームへの指示はブリルの裁量に任されること、ベームへの指令の内容は逐一報告しなければならないとされていた。またこの勅命によって、カムチャツカ行政はオホーツクから独立し、直接にイルクーツク県知事の管轄となった[85]。

ブリルは1772年9月6日ベームの出立に際し29条からなる指令状を手渡した[86]。それによると、カムチャツカ以外、イシギンスク(Ishiginsk)[87]、千島、アリューシャン列島の管理もベームに委任されていた。

ベームは精力的に活動し、カムチャツカの要塞を改良し、ペトロパヴロフスク（Petropavlovsk）港で角面堡を建設させた。またカムチャツカの地図、主要箇所の絵図と人口登録薄を作成させ、ボリシェレツクで最初の病院を作り、ミルコヴォには鋳鉄工場を建設するなど様々な方面で改革を行った。また航海を支援し、郵便船も建造した。交易を援助するための銀行、商船学校と日本語の学校を設立する願書も出したが、イルクーツクではベームの改革を疑問視する者もあらわれ、拒否された[88]。

その一方で、ベームがブリルから受けた指令状の第15、16条では、カムチャツカにおける農牧業について、以前からの努力が実り近年では収穫もよく、200頭の家畜が飼育されたこと、1767年に元老院の勅命により、農業を振興するため軍曹ロズニン（Roznin）が農作

79 Ibid., p. 168.
80 Ibid., pp. 167-168.
81 Ditmar, "Allgemeines ueber Kamtschatka," p.201. 5ヶ月の間に5368人が死亡し、生存者は2700人しかいなかった。
82 Moritz August von Beniovskii、ハンガリーの貴族出身の軍人。1767年からポーランドの対露軍に仕え、1769年にロシア人に捕らえられ、翌年流刑に処せられた。その後カムチャツカの長官ニロフ（Nilov）の信用を得たが、それを裏切り、1771年に脱走し、日本と中国を経由しヨーロッパへ逃亡した。
83 Adam Bril' は1767～74年イルクーツク県知事であった。
84 Magnus Karl von Behm はリガ出身のリヴァニア人で、1773～79年カムチャツカ長官であった。
85 Ditmar, "Allgemeines ueber Kamtschatka," p. 203; Sgibnev, "Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.," pp. 1-2.
86 Ibid., pp. 2-11.
87 イシギンスクは陸路でオホーツクからカムチャツカへ向う途中のイシガ川にあった。
88 Sgibnev, "Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.," pp. 11-18; Ditmar, "Allgemeines ueber Kamtschatka," pp.203-204.

の道具と穀物の種子を持参して派遣され、また1769年に商工業者リシュコフ（Ryzhkov）は道具と種子を持参しカムチャツカへ行ったが、収穫は僅かであったこと、さらに1764年4月30日にエカテリナ2世はその地域の開拓民に対する報酬として、家畜、穀物と農機具を配給したことなどが述べられていた(89)。そしてブリルはベームに、各場所の収穫についての詳細な知識を集め、それをもとにどこで農業を振興する必要があるのかを判断し、そのための開拓民を移住させ、穀物をレナ川から移入する必要がないように努力するべきことなどを指示した。またブリルは、家畜の数が僅かであるため、ヤクーツクでさらに購入し、それをオホーツクから陸路でカムチャツカへ送るので、その繁殖に尽力するようベームに命じた。

ベームはカムチャツカ在任中、農業振興に力を入れた。彼が到着した際、各集落ではカブ以外の野菜の出来は悪かった(90)。そこで彼は住民の食糧確保を心配し、各集落に共有農園と個人の菜園を設置し、カムチャダールにじゃが芋栽培を勧めた(91)。元老院は1765年にロシアにおけるじゃが芋の栽培を指示し、1767年にその種子をイルクーツクからオホーツクとカムチャツカへ送付した(92)。

また、ベームは既に存在していた二つの農場（zaimka）のほか、国有の模範農場を設立した(93)。ベームの在任当初、ライ麦と大麦の出来は良かったが、ベームの尽力にもかかわらず、成果は出なかった。ベームは6月末、また7月の始めにも時折霜が降りるため、カムチャツカにおける農業は当てにできないとイルクーツクへ知らせたが、ベームが在任中の穀物の収穫は概ね豊作で、1770年代のカムチャツカにおける穀物の栽培は比較的に良好であった(94)。

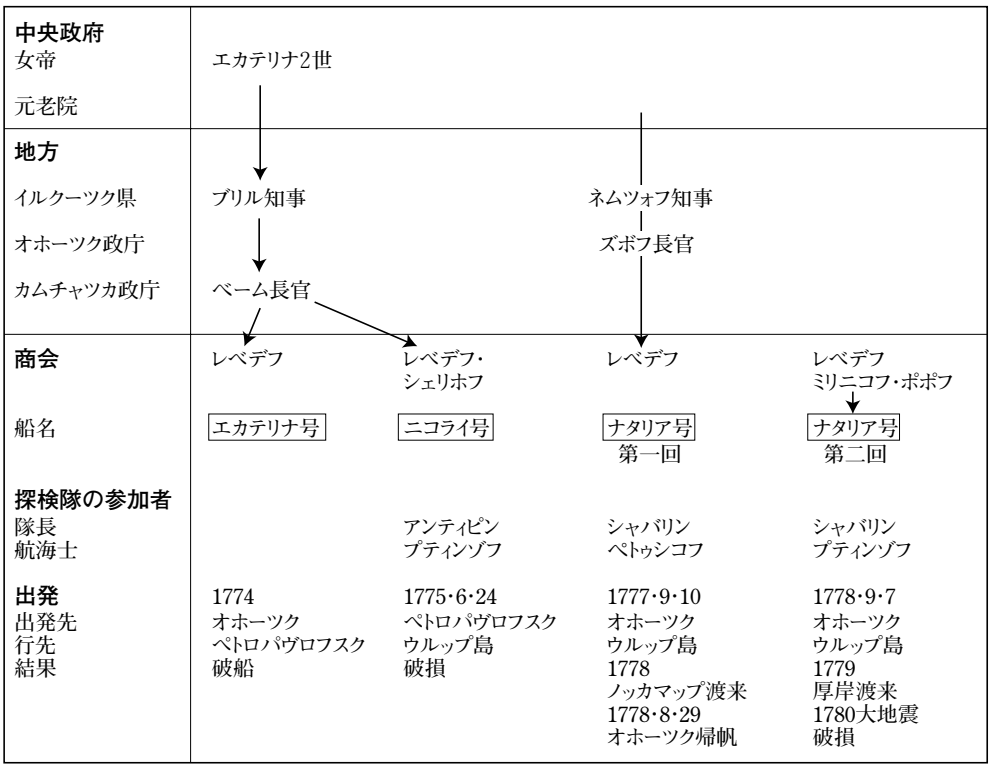
カムチャツカ半島はこの地域の農業活動の中心であり、その農業生産が不安定であったにもかかわらず、ロシア政府はカムチャツカにおける食糧の自給自足を強く望み、地方長官の意見にこだわらず、様々な方法で農業を改善しようと努力した。

89 Sgibnev, “Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.,” pp.6-7.
90 Gibson, *Feeding the Russian Fur Trade*, p. 180.
91 Sgibnev, “Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.,” p. 13.
92 Gibson, *Feeding the Russian Fur Trade*, p.180.
93 Sgibnev, “Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.,” p. 13.
94 Ibid., p. 13; Gibson *Feeding the Russian Fur Trade*, p.175.

2．ロシア人の蝦夷地渡来の経緯

第二節ではロシア人の蝦夷地渡来の経緯について述べる。以下の図は蝦夷地派遣についての経緯を図にまとめたものである。以下これにしたがって説明していく。

蝦夷地派遣についての関係図



（1）エカテリナ号航海とニコライ号航海

1772年11月28日にイルクーツク県知事ブリルは新任のカムチャツカ長官ベームに詳細な指令状を渡した(95)。それは、カムチャツカの改革に関する指令を主とするものだったが、千島についての情報も記載されていた。例えば、チョールヌイの探検隊は第19島エトロフまで南下したが、その報告書は下書きのままで、地図もつけられていなかったため、彼をイルクーツクまで呼び寄せたが、そこで彼は痘瘡のために亡くなったこと、チョールヌイの報告書では南千島や日本に関する部分は、アイヌからの伝聞が多かったこと、アイヌがチョール

95 Sgibnev, “Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.,” pp.8-9. 39条からなる指令状の第21条。1772 god noiabria 28. Iz instruktsii irkutskogo gubernatora general-poruchika A.I. Brilia glavnomu komandiru Kamchatki prem’er-maioru M.K. Bemu o neobkhodimosti organizatsii novoi ekspeditsii na iuzhnye Kuril’skie ostrova s tsel’iu ustanovleniia torgovykh otnoshenii s Iaponiei, Nr. 48, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 142-143.

ヌイに伝えた話によると、アイヌと日本の間で交易がなされ、第22島アトキスへは16人を乗せた2艘の日本の船が来て、さらに近年では第20島クナシリまでも来ていること、船は島々に1、2ヶ月滞在し、脂肪、魚の干物、ラッコ皮、海豹、鷲の尾を買い、酒、煙草、パン、秋まき作物、銀製のサーベル、刀、斧、青銅の鍋と脚が付いている鋳鉄鍋を売っていること、天気の良い時には、日本人は日本の町マツマイから一日でアトキスへ渡り、アイヌのほうもアトキスから小舟に乗って、交易のためにマツマイまで赴くことなどが述べられていた。またブリルはこれらの情報を確認するために、秘密裡に船を南千島の方面へ送る必要性を指摘した。そしてカムチャツカで船を建造し、その船は公のものではなく、できれば個人の毛皮商船のかたちで装備すること、千島方面のアトキス、できれば日本の町マツマイまで巡回させること、船には以前チョールヌイと一緒に諸島を探検した航路をよく知る人々と日本語通詞を乗せることを要請した。さらに派遣される人々には諸島の地理と生息している海獣についての詳細な調査、また地図を作成する任務が与えられた。またもし日本人との接触があれば、ロシアの品物でどのような物が日本人に適するか、日本の産物の中で、どのような物を輸入すればよいのかを調査し、その価値を見極め、交易を樹立する可能性を探ることも求めた。そしてアイヌを丁寧に扱い、ロシアの国籍に編入されるよう説得し、もし同意すれば、アイヌ1名をロシアの風俗を知らせるために船に乗せ、連れて帰るべきであるとして、ブリルはベームに千島の地図も渡した。

その後、ベームは長い間千島探検に従事する商人を探し、ヤクーツク商人レベデフ・ラストチキン（Pavel Sergeevich Lebedev-Lastochkin）（以下はレベデフと略す）にその探検を担当させようと提案した。レベデフは千島方面に関心を示し、1774年にオホーツクで政府の輸送船であるエカテリナ号に航海に必要な物品を積み、オホーツクからカムチャツカへ航海したが、船はカムチャツカ海岸で難破した(96)。しかし、ベームは「秘密」の探険隊の計画を諦めず、再び探検隊を千島方面へ派遣することとした。レベデフはシェリホフ（Shelikhov）(97)を商会に入れ、共同出資でムーヒン（Mukhin）商会よりニコライ号を買い入れた。探険の装備のために国庫から貸付金を得た(98)。探検の隊長および通詞にはアンティピン（Antipin）(99)が、また通詞役にはオチェレディン（Ocheredin）が、航海士補にはプティンツォフ（Putintsov）が命ぜられた。

1775年3月3日ボリシェレツク政庁は商人レベデフとシェリホフに宛て、千島探検の装備に関する勅命を出した(100)。勅命は、ブリルが1772年11月28日付でベームに出した指令状の第21条を取り上げ、秘密裡に商船隊を毛皮狩猟の名目で千島の第22島アトキス、場合によっては日本のマツマイまで派遣する探検の必要性を指摘し、その計画に参加したい商人に許可を与えるべきだと述べている。また今回の探検計画全体にあたっての指針は次のようなものであった。すなわち、第一にシェリホフとレベデフは航海にあたって、有能な航海士

96 Polonskii, *Kurily*, p.74.

97 Grigorii Ivanovich Shelikhov, リルスク生まれの商人で、1776年にオホーツクに赴き、商人レベデフと連絡をとり、最初に関心を千島方面へ向けた。Berkh, *A Chronological History*, p.55.

98 Makarova, *Russkie na Tikhom okeane*, p.143.

99 Ivan Antipin はシベリアの貴族であった。

100 1775 god marta 3. Ukaz Bol'sheretskoi kantseliarii kuptsam G.I. Shelikhovu i P.S. Lebedevu-Lastochkinu o snariazhenii ekspeditsii na Kuril'skie ostrova, Nr. 49, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 143-145.

と日本語に精通する人材、また装備のための道具について依頼し、ボリシェレツク政庁はニコライ号を使用する許可を与え、航海にあたる装備と島々の住民への贈物を用意すること、第二に日本人と出会った場合を考えて、アンティピンを含む日本語通訳2名を同行させ、給料を負担すること、第三に航海の経験のあるアンティピンに探検の目的を伝え、出発前に航海の装備を検査してもらうこと、第四に有効な身分証を持つロシア人、また首長の許可を得てカムチャダールを雇うこと、第五に航海の準備ができ、隊長が決まり次第、人員名簿を作成することなどであった。

また1775年6月8日にカムチャツカ長官ベームはアンティピンに航海の目的について特別に指令状を手渡した[101]。この30条からなる詳細な指令状の主要な指示は次のようなものであった。すなわち、航海や船の管理はアンティピンの指揮下に置き、船はペトロパヴロフスクから直接に第18島ウルップへ直航し、その状態を地図や記録に残すべきであること、ウルップ島に着いたらアイヌの攻撃から身を守る準備をし、アイヌに出会ったら彼らを脅かさないようにして、丁寧に振る舞い、彼らをロシア国籍に編入するよう努力すべきこと、また第18島ウルップと第19島エトロフで友好関係を樹立してから、第20島クナシリ、第21島シコタンと第22島アトキスまで赴くべきであること、また危険を考慮して早急に日本の町マトマイへは行かないこと、マトマイは異国で住民の習慣が分からないこと、第19島エトロフに日本人がいない場合は接触できるように努力すること、また日本人はロシア人にだけ遭遇すると疑惑を感じ、特に第20島クナシリ、第21島シコタン、第22島アトキスへ行く時には日本人に出会う確率が高いので疑惑を生じさせないようアイヌを同行すること、日本人に接触した際は礼儀正しく振舞い、親切に行動し、彼らと友好関係を樹立するために来たと説明し、もし相互の交易が約束できたら、そのことを書類に書きとめるべきであること、さらに日本と交易関係を樹立するためにエカテリナ2世の命令で蝦夷地に来た旨を伝え、その際レベデフとシェレホフの品物を見せること、また日本の習慣、交易、地理に関する情報を収集すること、南千島の調査や地理的位置の確認と地図の作成を行うこと、もしアイヌに地図があれば、それを写すべきことなどであった。さらに日本人がアイヌから色々な物品を購入しているように、ロシア側でも鍋、鶏、鷲の尾羽などの商品を商会から調達し、用意するべきであること、この「秘密」の航海が終わるまで、探険隊以外のロシア人は千島に行ってはいけないということも記載されていた。なお、ベームはアンティピンに、ベニョフスキーを捕まえる努力をせよと命じ、船をペトロパヴロフスクへ寄港させるように指示した。また地下資源の調査のため溶鉱所を設置すること、ウルップ島に各種の麦を試験的にまいて、農業の可能性を調査することも命じた。

1775年6月24日にニコライ号はペトロパヴロフスク港を出帆した。また、8月13日にベームはイルクーツク県知事ネムツォフ(Nemtsov)[102]に探険隊に関する報告を出した[103]。報告書には、第19島エトロフまではアイヌが居住しており、その島から日本の町マトマイまでは近く、アイヌはマトマイと交易をしていることが記載されていた。また、他の島々は

101 Polonskii, *Kurily*, pp.75-80; 1775 god iiunia 8. Iz instruktsii M. K. Bema nachal'niku ekspeditsii na dal'nie Kuril'skie ostrova I. M. Antipinu o podgotovke i zadachakh plavaniia, Nr. 50, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 145-154.

102 Fedor Nemtsov はブリルの後任として1774～78年イルクーツク県知事であった。

103 Polonskii, *Kurily*, pp. 81-82.

人の手が入っておらず、そこには毛皮獣、特にラッコが豊富に生息し、さらに地下資源の可能性もあるということ、また日本人がラッコやアザラシの毛皮を買いにアイヌの所へ来航することが報告されていた。ベームは千島諸島の占領を急ぐ必要性を説き、その理由として、ベニョフスキーが千島の情報を国外で漏洩する危険性を挙げ、そうなると外国人が千島の占領を企てる恐れも出てくることも指摘した。彼はさらに農業に適した土地を発見することも可能であると述べ、ウルップ島には要塞を設置して、これらの島々を領有することが必要であるとしていた。

エカテリナ号とニコライ号の派遣にいたる経緯は以上のようなものであった。ベームは特に南千島の地下資源と農業の可能性の検討を重要視し、またベニョフスキーの危険性について指摘した。アイヌへの礼儀正しい行動、また日本と友好関係を結び、交易の可能性についての調査をすることはブリルから指示され、ベームもそれに従った。ベームがアイヌへ注意深い行動を取ろうとする背景には1771年にウルップ島でアイヌがロシア人に対して反乱を起こしたことがあるとみられる。

結局、ニコライ号は８月９日にウルップ島で座礁した。アンティピンはウルップ島に乗組員を残し、1776年に小舟でカムチャツカへ戻った。180頭のラッコ皮、190頭のオットセイ皮、270頭の各種の狐皮を持ち返った(104)。

（２）ナタリア号第一回航海とノッカマップへの渡来

レベデフはウルップ島に残されたニコライ号の乗組員のため、1776年にイルクーツクの商人シャバリン（Shabalin）を小舟で派遣した。同時にレベデフはイルクーツク県知事ネムツォフに南千島アイヌをロシア国籍に編入し、日本と交易関係を樹立するため、政府の船を自費で借りる許可を求めた。一方シェリホフは、ニコライ号の投資が失敗したため、商会から脱退し、アリューシャン列島方面での毛皮交易に集中することになった(105)。

ネムツォフはレベデフの申し出が有益だと判断し、日本と交易を樹立し、特に第20島クナシリ、第21島シコタンと第22島アトキスのアイヌをロシア国籍へ編入するため、オホーツク港から政府の船ナタリア号を３年の期限付きで借り受け、レベデフに貸し与えた。レベデフはネムツォフと親密な関係があったとみられ、よく連絡をとりあった。また基本方針となったアイヌと日本への政策を果たすことを公約し、船を借りることに成功したとみられる。さらに、ネムツォフは以前ベームの報告を聞き、ベームの探検の様子を熟知していた。一方、ネムツォフはベームと不仲で、今回の探検では、ベームがカムチャツカから着手しようとした計画をオホーツクから着手しようとした(106)。

ナタリア号の操縦は熟練した航海士ペトゥシコフ（Petushkov）に任され、ペトゥシコフは出発にあたって、オホーツク長官ズボフから、第18島ウルップに到達する時に乗組員をシャバリンに引渡し、シャバリンがウルップ島に到着していない時には、ペトゥシコフが隊長となること、1778年までにはオホーツクへ帰帆すること、シャバリン、オチェレディン、乗組員の一部はウルップ島でアイヌをロシア国籍に編入するため残ること、日本人と出会っ

104　Berkh, *A Chronological History*, p.77.
105　Polonskii, *Kurily*, p.84.
106　ベームとネムゾフの関係については Sgibnev, “Istoricheskii ocherk, 1772 g.-1816g.,” pp.18-20 を参照。

た時にはロシアと交易関係を結ぶように説得し、交易のために一定の場所を決めること、さらに見知らぬ土地や島々の有無について調べる指令を受けた[107]。

またレベデフはペトゥシコフ宛にナタリア号航海の目的についての指令状を出した[108]。それによると、シャバリンに今回の航海についての指令を知らせること、第18島ウルップに着いたら、ニコライ号の座礁により島に残された人々から狩猟した毛皮を徴収し、契約に基づいてそれぞれ人々が投資した費用に応じて毛皮量を割り当て、集められた毛皮にシャバリンの封印をし船に詰め込むこと、狩猟活動を新たに開始すること、第19島エトロフ、第20島クナシリ、第22島アトキスのアイヌをロシア国籍に編入する努力をし、良好な関係を結んでから彼らが進んでヤサークを払うようにすること、アイヌの人口、首長について調査し、どのようなヤサークを希望するのか、どのような贈物を望むのか、彼らの願望について検討し、アイヌから１、２名をロシアの習慣を教えるために連れ帰ること、日本人と出会った場合は、彼らと交際を始め、彼らがロシア商人と交易するようもちかけ、毎年ロシアと日本の船が交易するための一定の場所を決めること、日本人が合意する場合、交易品について検討することなどが命令された。

また、1777年９月２日にオホーツク政庁はボルシエツク政庁宛にナタリア号の千島への派遣についての覚書を送った[109]。エカテリナ2世の勅命、オホーツク政庁の政令、イルクーツク県知事ネムツォフの令状を含むオホーツク長官ズボフ（Zubov）[110]の提案、またレベデフが提出した報告を通じて、次のような指令が出された。それによるとナタリア号はオホーツク港から第18島ウルップまで行き、そこに残された人々とシャバリンが合流し、狩猟に従事すること、アイヌに対して丁寧に振舞い、要求がましいことをせず、侮辱を加えた場合は死刑に処せられること、彼らをロシア国籍に編入し、ヤサークを払うように説得し彼らに贈物をすること、また彼らから人質（amanat）を要求し、アイヌのなかでロシアの町を見学することを希望する者がいれば、ロシアの習慣を教えるために連れ出すこと、アイヌには鉄砲、刀などは渡さず、彼らにそれを見せた場合でも処罰されること、また機会があれば日本の町まで行き、彼らに対し丁寧に振舞い、交易の可能性について尋ねること、ロシアがすべての国々と交易と交際を行っていることを伝え、また日本と日本人の生活ぶりについて情報を得ること、地図を作成し、興味深い物を集めること、地下資源の有無について調査すること、他の見知らぬ国、島々、民族の有無について、またその生活ぶりについて情報を得ることが指示された。

９月10日にナタリア号はオホーツク港を出帆し、ウルップ島に10月３日に到着し越冬した。翌1778年５月31日にシャバリン、オチェレディンの他、32人が３艘の小舟でウルップ島を出帆し、エトロフ島を経由して南方に進み、アトキスへ到達した。日本人に応接したロシア人は５日間アトキスに滞在した後、小舟でウルップ島へ戻り、ナタリア号はアン

107 Polonskii, *Kurily*, p.85.

108 1777 god. Nastavlenie P.S. Lebedeva-Lastochkina shturmanu M. Petushkovu o tseliakh plavaniia brigantiny “Sv. Nataliia” na Kuril’skie ostrova, Nr. 52, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 158-160.

109 1777 god sentiabria 2. Promemoriia kantseliarii Okhotskogo porta v Bol’sheretskuiu kantseliariiu o predstoiashchem plavanii brigantiny “Sv. Nataliia” P.S. Lebedeva-Lastochkina na dal’nie Kuril’skie ostrova, Nr. 51, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 155-158.

110 Savva Zubov は1775～81年オホーツク長官であった。

ティピンを伴って1778年８月29日にオホーツクへ帰帆した(111)。船荷は970頭のラッコ皮と340頭の各種の狐皮であった(112)。

このように、ベームはブリルからの指令を具体的にかたちにしたが、これを実行に移したのはネムツォフであり、しかもベームが計画したように、カムチャツカからではなくオホーツクから着手されることになった。ただし共通する方針としてはアイヌへの礼儀正しい行動、日本との交易樹立の可能性を探ることがあった。また、新たな方針として、日露交易に一定の場所を決めること、ウルップ島で狩猟に従事すること、見知らぬ土地を発見することが決められた。しかし南千島の地理に関する調査は地下資源の有無についての検討をのぞき、重視されていなかったとみられる。

（３）ナタリア号第二回航海と厚岸への渡来

シャバリンとアンティピンはオホーツク政庁に、千島アイヌと和解し、彼らの島々へ自由に出入りできること、日本人と贈物を交換したことや交易の取り決めのために翌年クナシリ島で日本人と再会する約束であることを報告した。レベデフは自分の裁量で、日本との約束を実現するために、直ちにナタリア号に交易の荷物を積み込んだ。レベデフの他には、トムスクのポポフ（Popov）商会とイルクーツクのミルニコフ（Myl'nikov）商会も物品を送った。シャバリンは隊長となり、アンティピンは通詞に、プティンゾフは航海士補に任命された。また、オホーツク長官ズボフはアンティピンに日本人への書簡を持たせた(113)。

９月７日ナタリア号は再びオホーツク港から出発し、ウルップ島へ派遣された。ウルップ島で越冬し、翌1779年の春にアンティピンとシャバリンのほか、45人を７艘の小舟に乗船させて出帆し、1779年６月24日にノトコメ（Notkome）という日本領の湾に着いた(114)。ロシア人は８月21日までにノトコメに滞在したが、日本からの船が到着しなかったため出発し、アトキスへ到着し、結局９月９日に日露交渉が開始された(115)。

一方、ナタリア号が1778年９月７日にオホーツク港から出発した直後の９月16日に、イルクーツク県知事ネムツォフは千島やアリューシャン列島へ赴く商人宛に指令状を出した(116)。この指令状には次のようなネムツォフの北方政策の意図が窺える。すなわち、ネムツォフは北太平洋におけるラッコと黒狐の狩猟から得られる利益を重くみて、狩猟のための新たな商会が次々設立され、それによって新たな島々が発見されることを期待していた。また毛皮交易は中国との友好関係にもつながっているとみていた。しかしそれ以上にネムツォフは、ロシア人が毛皮狩猟に従事することによる北方の島民との衝突を懸念していた。そのため彼は、商会の狩猟をより効果的に行うには、島民と友好関係を築くことが重要であると

111 Polonskii, *Kurily*, pp.85-86. ロシア人がアトキスだと思っていた所は実際にキイタップ場所のノッカマップであった。
112 Berkh, *A Chronological History*, p.77.
113 Polonskii, *Kurily*, p.88.
114 Ibid., p.90. ノトコメ（Notkome）はノッカマップをさすと思われる。
115 Ibid., p.91.
116 1778 god sentiabria 16. Nastavlenie irkutskogo gubernatora brigadira F. G. Nemtsova kuptsam, otpravliaiushchimsia na Kuril'skie i Aleutskie ostrova, No. 55, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 170-176.

いう提言を行った。またそうすることで北方島民のロシア国籍への編入も進み、より多くの北方島民を懐柔することができるようになるとみていた。さらにネムゾフは、日本人とアイヌの交易関係に着目し、日本人がアイヌを丁重に扱うことで友好関係を築いているという指摘も行った。さらにヨーロッパの国々のなかでオランダが日本ともっとも関係深い国だとして、オランダの北方進出を警戒した。またネムゾフはイギリス、フランス、ポルトガルなどヨーロッパ諸国もアリューシャン列島と千島における毛皮狩猟に興味を示す可能性があるという指摘を行い、ロシアが北方民と友好関係を築かない場合は、彼らが懐柔政策に乗り出す可能性もあるという懸念を表明した。

（4）その後のロシアの動向

1779年1月にレベデフは自らサンクト・ペテルブルグへ赴き、元老院局総裁のヴャゼムスキー公（Viazemskii）にアンティピンとシャバリンによる報告書、日本からの贈物、千島の地図などを渡した。そのなかには、1779年1月24日付のイルクーツク県知事ネムツォフがヴャゼムスキーに宛てた書簡もあった[117]。それによると、ネムツォフはヴャゼムスキーに、レベデフによって千島方面へ派遣された船の業績や日本人との初めての対応、そして千島アイヌが従属したことなどを伝え、レベデフの活動には相当な費用がかかり、その穴埋めとして彼に千島方面の独占交易権を与え、レベデフ以外の商人が千島へ行くことを禁止したことを報告した。またヴャゼムスキーにオホーツク長官ズボフを千島へ派遣する提案をした。ズボフは以前二度ほどイルクーツク県知事に千島へ行く許可を得ようとしたが拒否され、1779年7月30日に改めて日本人との面会のために第22島アトキスまで行き、交易を樹立すること、島々について正確な情報を得ることなどを県知事に約束した。またズボフは商船の体裁で探検を行うこと、新たな島々を発見すること、日本から一番近い島の適当な港のある所には石造りの家を造る口実で要塞を建てることなどを提案した[118]。

ヴャゼムスキーはネムツォフの書簡をエカテリナ2世に上奏した。エカテリナ2世は1779年5月29日にネムゾフの書簡に答えて、ネムツォフの後任クリチカ（Franz Klichka）[119]へ勅命を出した[120]。そこでは、同年4月30日の勅命に基づき、ロシア国籍に編入されている千島アイヌから今後いかなるヤサークも徴収せず、丁寧な取り扱いをし、狩猟と交易の利益を得るために、彼らと結んだ友好関係を維持するようにという指示が出されている[121]。また同勅令のなかで、エカテリナ2世は、将来日本と交易をする条件として、例外なくだれでも交易に従事できるが、けっして住民に迫害と不快を与えてはいけないと厳しく命じた他、1762年7月31日に出されたあらゆる独占権を禁止する勅命に基づき、レベデフの千島にお

117 1779 god ianvaria 24. Pis'mo F.G. Nemtsova deistvitel'nomu tainomu sovetniku general-prokuroru Senata kniaziu A.A. Viazemskomu o zapreshchenii kuptsam poseshchat' Kuril'skie ostrova, "iab'iasachennye" P.S. Lebedevym-Lastochkinym, No. 57, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, pp. 178-180.

118 Sgibnev, "Popytki russkikh k zavedeniiu," pp.50-51; Polonskii, *Kurily*, p.89. ズボフのオホーツク長官在任中の活動については A.S. Sgibnev, "Okhotskii port s 1649 po 1852 g.," *Morskoi sbornik*, No. 11 (1869), pp. 53-58 を参照。

119 Franz Klichka は1778～82年イルクーツク県知事であった。

120 Polonskii, *Kurily*, pp.89-90.

121 1779 god aprelia 30. Ukaz Ekateriny II Senatu ob osvobozhdenii ot podatei naseleniia Kuril'skikh ostrovov, priniavshego rossiiskoe poddanstvo, No.59, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, p. 182.

ける交易独占を取り消し、住民に迫害を与えないかぎり、狩猟や交易のために千島へ航行する自由を認めるとしている。なお女帝は、ズボフに対しては、ネムツォフがズボフの計画を有益だと判断すれば許可し、またズボフには島々に滞在中、住民に少しでも迫害と侮辱を与えないよう確約させるべきだと述べている。

このように、当時のロシア政府のシベリア・オホーツク地域に関する政策は千島における狩猟および日本との交易に関しては、国に有益となる活動をあらゆる者に許可し、アイヌに対する礼儀正しい行動を絶対の条件として課していた。またロシア政府はレベデフへの独占を容認しなかったが、その理由としては、クリチカがネムツォフの後任に任命されたために、レベデフへの厚遇もなされなくなったということが考えられる。

千島アイヌからのヤサーク徴収を中止した理由は鉱業参議会の会長で元老院議員ソイモノフ（M.F.Soimonov）が1779年4月30日にイルクーツク県知事クリチカ宛の書簡に窺える(122)。ソイモノフは千島アイヌをロシア国籍に編入し続けるとともに、ロシアに従属していない民族による攻撃から彼らを守るために千島で軍事力を維持することは莫大な費用がかかること、千島へ軍隊を派遣するイルクーツク県でさえ軍備が不足し、千島より優先すべき地域でも兵備が欠けていること、千島が遠隔の地であるため、他の地域から兵員を派遣することが難しいことなどを指摘している。

さて、厚岸で日本人と交渉したロシア人は日本との交渉が終了したあと、1779年の秋に小舟でウルップ島へ帰帆し、越冬した。翌1780年1月8日に強い地震が起こり、その後も余震が続き、6月18日にはナタリア号が陸上に打ち上げられ破損した。アンティピンはその後小舟でカムチャツカへ帰還し、報告書を提出した。2年にわたり獲得した毛皮の量は僅かであり、20頭のラッコ皮と100頭の各種の狐皮にすぎなかった(123)。

また、商人レベデフは4回も商船隊を千島へ派遣したが、ナタリア号の第一回の航海を除いて、船を破損したので、かなりの損失を蒙った。1779年4月30日にソイモノフがヴャゼムスキー宛に書簡を出し、そのなかでレベデフは自費で千島へ数艘の船を派遣したが、日本人と交易を樹立するために交渉したのは彼が初めてであったため、メダルを授与されたことを述べている(124)。しかし、エカテリナ2世の1779年5月29日付の勅命によって、千島方面の交易独占は禁止され、レベデフはその後アリューシャン列島に関心を向け、活発に商船隊を派遣した結果、有力な商人となった。

1781年5月1日にクリチカはヴャゼムスキーに宛て、アンティピンとシャバリン探検が成功しなかったことについて書簡を送った(125)。そのなかで、クリチカはまず前任のネムツォフからの1779年1月24日付の報告について触れ、シャバリンとアンティピンは島民の

---

122 1779 god aprelia 30. Iz pis'ma prezidenta Berg-kollegii M.F. Soimonova irkutskomu gubernatoru F. N. Klichke ob osvobozhdenii ot iasaka ainov na dal'nikh Kuril'skikh ostrovakh, Nr. 105, V. A. Divina, *Russkaia tikhookeanskaia epopeia* (Khabarovsk: Khabarovskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1979), pp. 473-474.

123 Berkh, *A Chronological History*, p.78.

124 1779 god aprelia 30. Pis'mo prezidenta Berg-kollegii senatora M. F. Soimonova A.A. Viazemskomu o nagrazhdenii P.S. Lebedeva - Lastochkina medal'iu za organizatsiiu plavaniia na Kuril'skie ostrova, No.60, Alekseev, *Russkie ekspeditsii po izucheniiu*, p.182.

125 1781 god maia 1. Pis'mo F. N. Klichki general-prokuroru A. A. Viazemskomu o neudachnom iskhode ekspeditsii I. Antipina i D. Ia. Shabalina, Nr. 106, Divina, *Russkaia tikhookeanskaia epopeia*, pp. 474-476.

調査のためレベデフによって千島へ派遣されたが、彼らは第22島アトキスへ行く機会があり、日本人と出会い、以後毎年夏に第20島クナシリで品物を交換する約束ができたと解釈したこと、彼らの報告を聞いたレベデフは1778年9月に、島民をロシア国籍に編入し、日本との交易を樹立するために、オホーツクから再び品物を積んだ船を派遣したが、オホーツクの長官ズボフも日本との交易に関心を示し、イルクーツク県知事ネムツォフに、第22島アトキスまで赴く許可を依頼し、ネムツォフは交易の樹立に理解を示し、これを承認したことをネムツォフから報告されたと述べている。またクリチカはズボフの計画を再検討するよう、政府から命じられ、彼はズボフの派遣には利益となるものは見当たらず、そのうえ費用もかさみ、またズボフは無謀で飲酒癖があるため、有能ではないと判断したとヴャゼムスキーへの書簡で述べた。さらにクリチカは1780年のアンティピンのカムチャツカへの帰帆について言及し、アンティピンがボリシェレツク政庁へ提出した報告書には、第22島アトキスにおいても、第20島クナシリにおいても、交易を樹立する可能性は少ないと書かれているとしている。また船の進水とその修理のためにまだウルップ島に残留している隊長シャバリンと乗組員のことについてふれ、彼らは船の部品や食糧が送られることを待っていると述べた。しかしレベデフが船を破損したこともあって、金銭的に苦しく、政府に残留者の救助と自らへの援助を求めたことから、クリチカは自らレベデフに財政的な援助を与えたことを報告し、ヴャゼムスキーの了解を得ようとした。またレベデフが提出した千島の地図、またアンティピンとシャバリンが日本人に歓迎された儀式についての説明を同封し、アンティピンが持参した日本からの品物については、送付する価値がないとして、別の機会に手渡すと付け加えた。

その後、ウルップ島に残された乗組員を救出し、また座礁したエカテリナ号を進水させるためウルップ島へ何回か船が派遣されたが、結局エカテリナ号の救助は失敗に終り、また1780年の千島に起きた大地震によって、ラッコが激減したため、ロシア人の狩猟活動は暫くの間、千島よりアリューシャン列島付近のほうに向けられた。

おわりに

最後に、安永年間にロシア人が千島に南下し、蝦夷地に渡来した背景について全体を総括する。

18世紀後半、ロシア人はシベリアや北太平洋で毛皮交易に従事し、商人は商会をつくり、狩猟のために商船隊を北太平洋へ派遣した。獲得した毛皮の大部分はキャフタで清国へ輸出され、キャフタ交易は政府による毛皮輸出の独占放棄によって自由化された後は、さらに繁栄した。商船隊が新たな土地を発見することや先住民をロシア国籍に編入することは、ロシア領の拡大となるうえ、ヤサークの増加、毛皮の獲得量の増加、さらに毛皮にかかる税収の増加がみこまれ、国庫にとって莫大な利益をもたらした。そのため、ロシア政府は商船隊と毛皮の狩猟の活動を奨励する方針をとり、その派遣を支援し、便宜をはかった。

またロシア人は千島でも毛皮狩猟に従事し、アイヌに遭遇すると彼らからヤサークを徴収し、たびたび残酷な行いをしたので、アイヌは南方へ逃亡した。当時のシベリア県総督ソイモノフはヤサーク収税吏やイルクーツクに住む日本人漂流民から、南千島において日本とア

イヌの間に交易が行われているという情報を得て、それを確かめるため、チョールヌイを千島へ派遣した。チョールヌイを含め、千島へ赴くロシア人は、アイヌへの残酷な行いを続け、その結果、1771年にウルップ島でアイヌとロシア人の間で衝突事件が引き起こされた。

一方カムチャツカにおけるベニョフスキーの反乱や疫病の発生などの混乱を収束させるため、ロシア政府はベームをカムチャツカ長官に任命し、また千島を含むカムチャツカ地域に関する政策をイルクーツク県知事ブリルの裁量に任せた。ブリルはベームの新任にあたって、カムチャツカにおける秩序の回復に関する指示をし、また南千島へ探検隊を送る必要性を説いた。

ベームはカムチャツカ長官在任中、様々な改革を行い、その一環として農業の振興にも取り組んだ。1770年代のカムチャツカにおける農作物の生産は安定しなかったが、ベームの農業政策は一定の成果を得、政府はこの段階では食糧供給の困難を国内、とりわけカムチャツカで解決できると期待していたと思われる。また千島探検に関する計画のなかでも、ベームは南千島における農業の可能性に注目しており、探検隊の隊長であるアンティピンに、ウルップ島での滞在中、各種の麦を試験的にまいて、農業の可能性を調査するよう命じていた。しかし、ニコライ号は破損し、アンティピンがウルップ島で農業に関して調査をしたかどうかは不明である。またその後、千島探検はオホーツク方面から着手されることになり、ナタリア号の千島への派遣にあたっての指令状には、農業を調査する指示はみあたらなかった。とすれば、従来の見解が述べるように、ロシア人の千島探検の目的が食糧供給問題の解決のため、農業の可能な南千島を手に入れることであったとするのは早計といえるだろう。

一方、安永年間における千島探検の目的を明らかにする際の手がかりとして、ブリルの指令状は重要な位置を占めている。ブリルはベームに下した指令状のなかで、チョールヌイ探検における南千島についての情報、特に日本とアイヌの交易に関してはアイヌからの伝聞が多く、チョールヌイ自身も亡くなったため、その情報を確かめることができないと述べ、その真相を探るため、南千島へ新たな探検隊を派遣する必要性を指摘していた。このように、千島探検が行われる直接のきっかけとなったのは、南千島におけるアイヌと日本人間の交易の有無とその実態を探るためであったと思われる。さらにブリルは、アイヌに対する「礼儀正しい行動」とロシア国籍への編入、できれば日本人とも接触をし、交易の可能性を探ることを探検の方針とした。このような方針はこの時期におけるロシア人の千島政策の原型となり、これに沿ってベームは探検計画を具体化した。またニコライ号の遭難による計画の変更の際、オホーツク方面から船が派遣されることになり、地下資源の調査などが計画に加えられた際にも、ブリルの方針にあったアイヌへの懐柔政策と日本人と接触した場合は交易の可能性を探るという点は、共通していた。

安永年間におけるロシア人渡来は、日本側からすると蝦夷地を最終目的地としたようにみえる。しかし実際は、ロシアが千島を南下する過程でアイヌと遭遇し、アイヌと友好的な関係を築くことで南下する際の無用の衝突を避け、またアイヌを懐柔してロシア国籍に編入することが、ヤサークの徴収や、さらには領土拡大にもつながり、このようなかたちでアイヌとの関係を深めていったことが、必然的に日本人との接触にもつながったと考えられるのである。